

## 入選

テーマ：医療と福祉、わたしの体験  
「音のない世界」

神奈川県・横浜市立ろう特別支援学校高等部2年 武石杏奈

2002年1月29日、私は昼の12時過ぎに生まれた。1歳半になって、耳が聞こえないことが分かり、障害を受け止められなかった母はショックを受けたが、私の将来のために奮起していろいろ調べ、横浜市立ろう特別支援学校に入学することになった。

小学3年に進級し、サッカーが大好きなろうの先生と出会った。毎日、給食終わりに自分の教室へ戻ると、必ず先生と小学校高学年の先輩たちが「サッカーをやるよ」と誘ってくれた。私は初めてサッカーをやるので、サッカーのルールなど知らなかったけれど、先輩が「大丈夫、僕たちが教えてあげるよ」と言ってくれた。練習でサッカーボールに触れると、心臓がドクンドクンと打つようになった。こんな気持ちになるのは初めてだった。その後は授業を受けている時でも、本当にサッカーしか頭に入ってこなくなった。私は、早くサッカーをやりたくてやりたくて仕方がなかった。私は昼休みだけでなく、放課後の学童保育、放課後児童クラブでも、年齢を問わずみんなでサッカーにあけくれた。私が熱中したサッカーは、ろう者が行うデフサッカーで、試合の動きをしつかり予測して動かないと、耳の聞こえない・聞き取りにくい私たちはゲームをつかむことができない。そのため、通常のサッカーの練習や試合よりも集中力と体力が必要とされる。ろうの私たちは意識を向けないと、音が耳に入らないため、練習後のプレーの反省や周囲を見渡すことを大切にしている。

ある日、先輩たちが私に「サッカーの世界の高みを目指してみたら？単なるサッカー好きのままで終わらせることは、とてももったいないよ」と言ってきた。初めは言葉の意味がよく分からなかったものの、先輩や親に応援され、サッカーへの思いがさらに高まっていった。そ

んな時、テレビでなでしこJAPANサッカーの試合を観戦して、選手たちの活躍する姿に、私は惚れてしまった。私が一番惚れたのは、澤穂希選手だ。澤選手は、なでしこJAPANのキャプテンで、ミッドフィルダーで活躍していた。その活躍を見て、私はサッカー女子日本代表にあこがれた。ある時、近くでサッカーイベントがあると聞き、行ってみた。すると、日本代表の選手たちがたくさんいて、その中に私と同じ聴覚障害をもつ選手がいることを知った。「え、私たちと同じろう者の日本代表がいる！」と、私はとてもびっくりした。

聞こえないハンデをものともせず、活躍する姿がとても格好良かった。その後イベントがあるたびに参加するようになった。すると、ろう女子日本代表合宿に監督から誘われ、参加できるようになった。

2018年4月、ろうの女子サッカーはアジアサッカー選手権大会を皮切りに、世界選手権大会、そしてその上のデフリンピックへの道が開かれた。私もデフリンピックを目指し、アジアサッカー選手権大会へ向けて練習を重ね、日本代表に選ばれることになった。4月23日、アジアサッカー選手権大会が韓国で開催された。私は試合の後半に出場し、あこがれの澤選手みたいに守備役で活躍した。守備役として点を奪われずに思い切り守ることが本当に楽しかった。日本がどの試合も勝ち抜き、優勝することができて、アジアサッカー選手権大会の初女王&世界大会への切符をとることができた。これからも試合が続くが、澤選手のようなトップを目指して、音が聞き取りにくいハンデをもついても私はいろいろなことに取り組み、大きな舞台に飛び出していきたいと思っている。